

熊本県女性と復興プロジェクト講演会

「わたし」から始まる復興を考える

熊本地震から1年がたった今、これからわたしたちはどう復興していけばいいのか。女性の視点からの復興について、7月7日(金)、東日本大震災後、被災者支援や復興に取り組む木須八重子氏をお招きし、お話いただきました。講演後は、地域づくり関係者や学生等、約50人の参加者と、熊本の復興について意見交換を行いました。

講師
公益財団法人せんだい
男女共同参画財団理事長
木須 八重子氏

1978年仙台市役所入庁。生涯学習、男女共同参画、総合計画、市民協働、環境などを担当。宮城野区長であった東日本大震災発生時、宮城野区災害対策本部長として、被災者支援の初動時対応から、仮設住宅移転、集団移転に向けたコミュニティ形成などに取り組む。



経験したからこそ見えたもの

熊本と仙台、私たちは偶然にも同じ経験をしました。被災経験は大変つらいものですが、同時に貴重なものでもあります。図らずも同じ経験をしたからこそ、遠く離れた地でわたしたちは共感しながらつくることが出来ます。

仙台市では、昭和53年宮城県沖地震が発生した6月12日を「市民防災の日」として、大規模防災訓練を行っています。たが、ごちそうと警察や消防など専門職の部門が日頃の成果を見せる場になっていました。小さな子どもがいる女性や家族に要介護者がいる方など、災害時に助けを必要とするかもしれない人の参加が少ない状況に、「これで十分な訓練ができていいのか」と考え、宮城野区の訓練のときに女性目線の防災を考えることにしました。

地域の現状を互いに知るために子育て中の女性や子育て支援の方、高齢者の方々と数回ワークショップを行いました。そこで、層間に災害が起きたら家族がいない時に逃げられるだろうか「隣の人にちやうと手を貸すことはできるよね」と口をついて出たつばやきを集めて「岩切地区」女性たちの防災宣言をつくりました。東日本大震災が発生す



り運営委員会のメンバーにもなりました。

震災が起きるまでは、男女共同参画という言葉も知らず、地域の役割に就いていなくても、女性は十分復興の担い手として力をもっていました。女性が家庭でやっていることの延長でも家庭の外で誰かのために動くこと、それは社会的な貢献です。素晴らしいリーダーシップとして評価されるべきです。引っ張っていくだけではない、支えるリーダーのように、多様なリーダーシップがあった方がいろんなことが前に進むということを彼女たちが証明してくれました。

前よりももっとよくなる

震災を通じて、体験を語り継ぐことの大切さ、誰かのために動くことの大切さを学びました。「前よりもっとよくなる」ことを目指して動くこと、そしてこの困難を次の災害のときに起こさないようにすること、それを伝える力を持っているのは体験した人だけなのです。図らずも被災経験を共有する仙台と熊本が、緒になって次の災害に備えていきましょ。



「パンジー」
女性の多様なリーダーシップ

せんだい男女共同参画財団で発行している「パンジー」という冊子があります。この中には、震災後、自分ができる小さなことから取り組んだ女性リーダーの紹介をしています。防災宣言をした岩切の女性

リーダーも紹介しています。彼女は今や全国各地で女性目線の防災の話を伝えています。また、ある仮設団地の運営委員長さんの娘さんも、集会所で女子会を始めるように言われてリーダーシップを発揮した人ですが、彼女はまちづく

る前の年でした。

震災後、全国の様々な場所での防災宣言が取り上げられました。なぜでしょう？ 私たちはつくる時に「ものすごく立派なこと」言うのはやめよう。自分の言葉で隣の人に伝えるような宣言にしよう」と話をしました。女性たちが女性たちの立場でつくった宣言ということが共感されたのだと思います。

しかし、彼女たちにとってはこれで終わりではありませんでした。地震が起きて、岩切地区の女性たちは避難所の支援に向かいましたが、十分に動けず、避難者からもいろんなことを言われました。悔しくて、もっと力をつけないといけないと思ったそのときが、彼女たちの本当のスタートでした。そして、2015年に、もう一度宣言を作り直す活動に自主的に取り組み始めました。

女性たちの困難

阪神淡路大震災や新潟県中越地震の経験から、災害時に女性の支援が必要というのは語り継がれていて、東日本大震災後に外からの支援の申し出や情報はものすごく早

女性と復興プロジェクト
ワークショップin益城町

平成29年12月14日(木)



ファシリテーター 足立千佳子さん
まちづくりワークショップファシリテーター。震災後は仙台と登米の2か所を活動拠点とし、手仕事・食・情報の3つの視点で女性支援活動を行う。

私たちができる、
益城の「復興」を
考えよう！

誰でも気軽に参加できる3回シリーズのワークショップ、第2回は「10年後の益城のために、明日からできることは何ですか」をテーマに開催しました。まずは足立さんが関わった、被災地の女性たちが作るご当地オリジナルデザインのアクリルたわし「編んだもんだら」が誕生したエピソードについてお話がありました。



その後、集まった参加者同士で、地震から1年8か月経った今の思いを互いに話し、「みんなが集まっても不安な気持ちやこれからのことを話す場が必要」等と意見交換を行いました。足立さんからは「ひとりの課題をみんなの課題として共有することが非常に大事。ここで出会った人とのつながりが、これから何かをするときにきつと役に立つ」とエールが送られました。